

北海道スキー指導者協会の歩み

<シュプール 37 号掲載>

藤 島 勝 雄 編著

昭和 27 年 10 月 1 日、北海道一般スキー指導員会として発足した本協会が、機関誌「シュプール」の発行などによって活動を活発化してきたが、指導員の増加に伴う道連教育部の増大により、指導員会との二重構造の弊害が出てきて、昭和 41 年 1 月シュプール 7 号が発行されて以降、13 年間に亘って活動が休止した。

昭和 54 年 4 月道連教育部理事会において、北海道基礎スキー指導員会の再起が話題となり、再起検討委員会を経て、昭和 54 年 10 月 13 日再起設立総会が開催された。これを機に活動が再び活発化し、シュプールの復刊、支部、会員の増加となり、これらの活動の高まりが後に日本スキー指導員会の発足へと繋がっていくことになる。

6、再起後活動活発化し、支部、会員共に増加

S56,10,25 札幌クラブ	昭和 57 年度 代議員会及び支部長会議 1、経過報告（27 支部、1,791 名） 2、会計報告 総予算 150 万円 3、審議事項 事業計画などは、組織が混乱しているので提案できず、代議員、支部長の意見交換を中心に話し合った。道連と指導員会の機構や組織は違うのだが、誤解されやすい面がある。従って、指導員会でなければ出来ないもの、今後、文部省や S A J に物を言う場としてこの会の存在の認識を是非持ってもらいたいし、これが、将来メリットとなる展望を持ちたい、ということで各支部の大同団結を期待する声が多く出された。 4、役員改選 会 長 柴田信一 副会長 栗林薫、速水潔、小室浪一、佐藤哲郎、音喜多一二 （後に音喜多一二が病氣辞任のため坂井監査が副会長に） 監 査 二瓶康典、坂井敏夫 幹 事（札幌 7 名、小樽 2 名、後志 2 名、岩見沢 1 名の枠を決め、該当地区からのからの報告を会長が委嘱） 中川伊佐美、飯田誠一、戸塚孝司、近藤晃、伊藤博、榎並利郎、中山寛、嶋本一雄、廣井弘、安田政明 活動再開に向けての各支部の準備が整わず、組織の再建がなかなかスムーズに行かなかったことが伺われる。しかし、「文部省や S A J にものを言う場としての会の存在の認識」と、北海道の指導員会としての気概が伝わってくる。
S 56,12,1	シュプール第 9 号（復刊 2 号）発行 —座談会— 「先鋭スキーを目指して」 ・出席者：柴田信一（会長） 山谷永蔵（道連教育部長）

	北河茂（ＳＡＪ教育本部指導部長） 吉田幸一（基礎選１位） 霜鳥敏明、細野 博、紺野光弘、出倉義克、 ・司 会：藤本 進（ＳＡＪ教育本部強化主任コーチ） —柴田会長の開会挨拶— 北海道のトップ級の若い君達は何を考えているか。前から藤本君や関健太郎君が考え方をジャーナルに書いているが、写真を見ても読んでもよくつかめない。藤本君と話をしたいと言うことで若い人を連れてきてもらってこの会になった。 <内容> 技法の移り変わり、現在の滑り、技法と用具、荷重と加圧、シュプールの求め方、雪面とのコンタクト
	座談会では、本誌 59 ページ中 16 ページと多くの紙面を費やしている。柴田先生の技術に対する熱心さが表れている。 この復刊 2 号の大きな特徴は、企業広告を初めて載せたことである。ミズノ、オガサカ、大和ルスツスキー場、ニセコアルペン山荘、ニセコモイワスキー場、石屋製菓、花王ニベア の企業が名前を連ねている。
S 57,8,28 ・ 29 田仲旅館 (東京)	仮称「日本スキー指導員協会」設立発起人会 ・出席者：北海道（柴田会長、中川幹事長） 山形、秋田、宮城、福島、茨城、栃木、埼玉、千葉、東京、神奈川、新潟、石川、大阪から 32 名 ・設立趣旨： 指導員間の研究交流を計り、指導員の資質の向上を目指す。 ＳＡＪの行政の足らざるところを、指導員会同志横の連携を取りあって共通理解、スキー界の進展に寄与する。 ＳＡＪの拘束を受けることなく独自の活動をする。 ・名称：(財)全日本スキー連盟 日本スキー指導員会 ・この他に、組織結成の手順、活動内容、資金などについて討議され、設立の方向に歩が進められた。
S 57,11,21 札幌クラブ	昭和 58 年度 代議員会及び支部長会議 ・一般経過報告（37 支部、2,663 名） ・会計報告（252 万円） ・(財)全日本スキー連盟 日本スキー指導員会についての報告（中川幹事長） ・日本スキー指導員会についての活発な討議の結果、58 年 4 月末頃までに全国組織に対する考え方、参加について、各支部会員の意思を集約することなどを決定した。
S 57,11,21	シュプール第 10 号（復刊 3 号）発刊 —柴田会長巻頭言— 我々は、指導員団結を呼びかけてきた。なぜか。それは我々の個々の力では、現代のスキー界という大きく、速い流れに対応してゆくことが出来ない。(中略) 長い間叫んできたスキー指導者の養成機関、今のスキー行政の中では到底不可能に近い。検定や研修を取り巻く諸問題、一人が幾ら叫んでも馬耳東風である。やはり組織されなければならない。我々は決して圧力団体にはならない。日本の教育行政の正しい進歩のための支えとして存在するだろう。「指導員会存在のメリットは？」と云うことをよく耳にする。物質的なものだったら ＳＡＪ

	の組織に入ってほしい。我々アマチュアは、社会体育に奉仕する喜びと、我々の後に続くであろう指導者のために、よりよいスキー環境づくりを使命としたものである。 —研究—「カービング・ターンへのアプローチ」 小樽 琴坂 守尚 1、カービング・ターンとは カービング (Carving) の語源は、Carve = 彫る、刻むの意。カービング・ターンとは、雪面をエッジで鋭く切り込む、いわゆる「切り込みターン」を意味する。カーブ = Curve (曲げる、曲線) と紛らわしい。 スキーの滑走面ではなくエッジを用いて滑る。充分にエッジを利かして、狭い安定圏の中でのすぐれたバランス能力が必要とされる。 は省略 2、カービング・ターンの練習プログラム (項目のみ) イ、外スキーの上でバランスをとる ロ、スキーを踏みたわませる ハ、スキーの踏み場所をさぐる ニ、スキーを踏む時期をさぐる
	柴田会長の巻頭言には、新しく出来るであろう「日本スキー指導員会」への熱い期待と、SAJ に対する「ある思い」を感じる。 琴坂先生の「カービングターン」には驚かされた。SAJ が中央研修会 (車山) で全国から集まった専門委員・ブロック技術員に副読本「カービングスキーのスキー指導」を配布し、各メーカーのカービング板を試走させたのは、この研究発表の 16 年後の平成 9 年 11 月 28 日であった。 先日、先生にお話を伺ったところ、「北大の水谷先生の話」とのことでした。 日付を見てお分りの通り、代議員会に合わせてシュプールを発行している。と云うことは、この代議員会で決まった事は次の年のシュプールに載ることになる。前ページの昭和 58 年度代議員会報告は、次の年の第 11 号を見て書かなければならない。この様な発行形式は平成 18 年 10 月発行の第 34 号まで続く。
7、日本スキー指導員会発足	
S 58,6,11 (東京)	日本スキー指導員会設立準備委員会 ・出席者：中川伊佐美 (北海道) 金井、西原、瀬川、小林、堀、松浦、三塚、柳沢、清水、小沢、松谷、相沢、津守、菅、岡田 (SAJ), ・事務局：服部、林、田仲、荒井、斉田、 ・正式名称：(財) 全日本スキー連盟 日本スキー指導員会 ・活動目的、資格、会費、設立総会時期などを決定した。 北海道は、冠について全日本の隷属機関になるおそれ、国家検定制度発足以後の指導員の掌握、全日本の体質 (競技と教育の目的意識の違い) 等の立場から反対した。が、冠がないと正式に認められない、専任教師協会より下に見られる、などから (財) 日本スキー連盟の冠をつけることになった。
S 58,9,25 札幌クラブ	昭和 59 年度 代議員会及び支部長会議 ・一般経過報告 (41 支部、会員 3,221 名) ・会計報告

	・討議 日本スキー指導員会の報告・対応について スキー場のペンション・旅館・リフト会社等と契約して割引制度をすすめる、として、ペンション・旅館 20 軒、リフト会社 2 社と契約して会員証提示によって割引が受けられる。 ・役員改選 会 長 柴田信一 副会長 栗林 薫、速水 潔、佐藤哲郎、小室浪一、坂井敏夫 監 査 二瓶康典、新田利雄 幹事長 中川伊佐美 幹 事 近藤 晃、飯田誠一、戸塚浩司、中山 寛、嶋本一雄、榎並利郎、菊池真一郎、伊藤 博、安田政明、福地 白、松川 恒、三岩 昇
S 58,9,25	シュプール第 11 号（復刊第 4 号）発行 —掲載内容— ・会長挨拶 ・研究 6 名 ・意見 3 名 ・特別寄稿 1 名 ・視察報告 2 名 ・随想 5 名 ・支部たより 5 支部 ・事務局より この号の特徴として 掲載項目を見てわかる通り、非常にバリエーションに富んだ内容になってきたことである。それに伴い、当然ページ数も増えてきた。因みに、第 8 号（復刊 1 号）90 ページ、第 9 号 60 ページ、10 号 98 ページ、この号は 126 ページと前号の 3 割増しとなった。これは、各支部が北海道スキー指導員会の活動が認知されてきたことと、執行部の充実がこの結果となったのであろう。 前号に載った広告が消えた。広告を取る余裕が無いほど紙面充実か、会費納入が多くなり広告料が必要なくなったか。いずれにしても、シュプール上に広告は暫らくは顔を出さない。 視察報告として、坂井敏夫副会長（現会長）が、「ヨーロッパのスキー指導者養成をみて」として、1 ヶ月の視察・研修の成果を報告している。
S 58,10,30 日本学生会館（東京）	「(財)全日本スキー連盟 日本スキー指導員会」 創立総会 —柴田信一発起人代表挨拶— かねてより念願の指導員会全国組織が軌道にのってきた事は大変喜ばしい。指導員数が多くなり縦の系列だけでなく相互の意思の疎通、情報通達、コミュニケーションを計る上での指導員会の役割は大である。本日の会議は一指導員の立場で皆さんと共に参画しているが、指導員の身分に関することについては、全日本スキー連盟に諮問されるような会になってほしいと願っている。 ・経過報告 ・規約決定 ・役 員 会 長 柴田信一 副会長 栗林 薫、堀 修一、小林 茂、菅 秀文、西原 雅、浅井清治郎、丹内正一、松浦益司郎、金井英一郎、 監 査 宮本忠五郎、谷 道夫

	常任幹事 中川伊佐美、元木義夫、青木巖、林権一、津守達男、吉田晃一郎 幹 事 近藤晃、福地白、松谷富彦、小沢昭寿、須田克彦、古賀澄夫、 柳沢須佐男、矢口昭二、小助川瑞雄、岡田興一、荒井哲夫 顧 問 田英夫、天野誠一、山本富雄、福岡孝純、小林作男、西山実幾、 瀬川佳男、堀恒也、片桐匡、岸英三、大熊勝郎、児島嘉男、 藤巻文司、三塚正二郎、中沢清
	柴田会長は、シュプール 10 号でも述べているように、この指導員会に大きな期待を寄せていることが分かる。他の場面でも、団結、団結することの大切さを度々述べている。 創立総会において、SAJ の公認団体として春の評議員会に申請する事を決定していたが、東海北陸、西日本の足並みがそろわないため、北海道の提案通り SAJ への申請を見合わせることにした(59,5,20)。 この問題は過去だけのものではなく、今また、同じような事が起こっている。
8、第 1 回	「全道スキー指導員の集い」開催される
S 59,9,30 札幌クラブ	昭和 60 年度 代議員会及び支部長会議 ・一般経過報告（49 支部、3,625 名） ・会計報告 ・提案、審議事項 新資格取得者へシュプールの贈呈 故高橋次郎氏及び柴田信一会長の顕著レリーフの建立
S 59,9,30	シュプール第 12 号（復刊第 5 号） —柴田会長巻頭言「スキー人口が減っている（要旨）」— ヨーロッパ各地のスキー場で若い人達が少なくなり、滑っている大部分は中高齢者と夫婦者。スキー学校への入校者も、良くて横ばいもしくは減少傾向。 その理由は、若者気質、遊びの多様化、そして一番の問題は、金のかかり過ぎ。靴、板、服装、旅費など。高価なものはそれなりに良いが、安価なものでもスキースポーツの目的は十分に満たすことが出来る。メーカーの皆さんと我々指導員が深く考えないと、日本のスキー界もスキー離れが現われるかもしれない。自縄自縛にならないよう心したい。 —掲載内容— ・研究 4 名 ・意見 2 名 ・随想 5 名 ・支部だより 10 支部 ・事務局より ・協定旅館、優遇リフト一覧 ・特別寄稿 —サラエボオリンピックの印象と所感、道連理事長 清野 市治— 柴田会長の巻頭言「スキー人口が減っている」は、正にその後の日本のスキー人口の減少になって現われている。確かに中央研修会で福岡さんが「10 年度の日本が同じようになる」との警告を聞いたことがある。SAJ はこの警告に、何らかの手を打ったのだろうか。 この号の特徴は、支部だよりが大幅に増えた。それも、中身が「指導員 100 人突破」「指導員スラローム大会」などバリエーションに富んできた。協定旅

	館・優遇リフト会社の一覧表が巻末に 22 社が掲載された。概ね 10%引きの金額が表示されている。「利用時には、指導員会の会員証を提示すること」とある。 私はこの時の会員証を今でも持っている。シュプールの表紙と同じ“緑色にストック”のデザインである。
S 60,5,12	故高橋次郎氏、柴田信一氏顕彰碑（レリーフ）建立 ・全道の指導員 3,270 名の醵金により、小樽天狗山「スキー資料館」に建立
S 60,9,29 札幌クラブ	昭和 61 年度 代議員会及び支部長会議 ・一般経過報告（52 支部、3,758 名） ・シュプール 4,000 冊印刷 ・日本スキー指導員会総会報告 - 柴田会長「総会の空気として、不備な点が多く北海道は退会したくなるような気分であった。北海道の建設的な意見の懸案事項を、総会にかけない独断的行為にたいし強硬に申し入れた。」 ・幹事の選出 - 札幌中心の選出をやめ、次のようなブロック別選出とした。 - 道南 2 名 道西 4 名 札幌 8 名 道央 3 名 旭川 2 名 道北 2 名 道東 2 名 ・役員改選 - 会 長 柴田信一 - 副会長 栗林 薫、速水 潔、佐藤哲郎、小室浪一、坂井敏夫 - 監 査 二瓶康典、新田利雄 - 幹 事 後日、各ブロックから選出 ・講演「歩くスキーの現状」北海道教育大学旭川分校教授 今村源吉 日本スキー指導員会（日指）の創立時の東海北陸・西日本の問題といい、この代議員会での柴田会長の日指総会報告「北海道は退会したくなるような」といい、“指導員会”に対して北海道と他のブロックとでは相当の温度差があるように感じるし、今現在も、会議に出る度に同じことを強く感じる。 加盟支部が全道的に広がり 50 を超えるまでになった。これにより、札幌中心の役員（旅費関係）だけでは不都合になり、全道 7 ブロック別の幹事推薦となり組織として体を成すようになってきた。しかし、最高決議機関である代議員会の承認を得ないで幹事が決定する不合理が残っており、このことは、つい最近まで続いていた。
S 60,9,29	シュプール第 13 号（復刊 6 号）発行 —掲載内容— ・項目は前号と殆ど変わらず ・特別寄稿 「1985 年度全日本教育本部総括」 SAJ 教育本部長 菅 秀文 —この号のみ— ・顕彰碑のお礼にかえて 5 月 1 2 日に天狗山で行なわれた「顕彰碑建立」に対して、柴田先生がお礼の言葉を載せています。 ・基礎スキー指導員意識アンケート

	—新しい掲載— ・会員の訃報 ・シュプール編集内容（復刊第 1 号から前号までに項目を巻末の折込みで掲載）																				
	指導員会組織の充実と掲載内容の多彩さと相俟って、160 ページもの機関紙となった。菅 SAJ 教育本部長が、「伝統ある “シュプール” に筆を取れと云う光栄に浴した」と書き出しているように、通算 13 号となり全国的な市民権を得た号でもあった。																				
S 60,11,16	61 年度第 1 回幹事会開催 ・道指導員会主催「全道スキー指導員の集い」の開催を決定 ・各ブロックから選出された幹事の職務分担 <table><tr><td></td><td>部長</td><td>副部長</td><td>担当幹事</td></tr><tr><td>総 務</td><td>福地</td><td>大友</td><td>吉田、金子、安田、飯島、浜</td></tr><tr><td>会 計</td><td>飯田</td><td>戸塚</td><td>榎並</td></tr><tr><td>事 業</td><td>近藤</td><td>稲村</td><td>松川、広山、佐藤、大黒、大塚</td></tr><tr><td>広 報</td><td>菊池</td><td>山口</td><td>中尾、岡田、原、鈴木</td></tr></table>		部長	副部長	担当幹事	総 務	福地	大友	吉田、金子、安田、飯島、浜	会 計	飯田	戸塚	榎並	事 業	近藤	稲村	松川、広山、佐藤、大黒、大塚	広 報	菊池	山口	中尾、岡田、原、鈴木
	部長	副部長	担当幹事																		
総 務	福地	大友	吉田、金子、安田、飯島、浜																		
会 計	飯田	戸塚	榎並																		
事 業	近藤	稲村	松川、広山、佐藤、大黒、大塚																		
広 報	菊池	山口	中尾、岡田、原、鈴木																		
S 61,7,26 札幌	第 1 回「全道スキー指導員の集い」開催 —実施内容— ・講演会（道立札幌中島体育センター） 「新日本スキー教程における技術について」 藤本 進氏 「国際スキー情報について」 福岡孝純氏 ・懇親会（アサヒビール 百景園） ・出席者 120 名 —柴田会長開会挨拶— 当指導員会も機関誌シュプールの発刊を行なっているが、指導員同志が一堂に会する場がということで今回の企画をしたものである。第 1 回でもあり種をまく心境である。最近では、日高・十勝など次回の「スキー指導員に集い」開催の希望もあり、全道を 7 ブロックに分けて開催される今後の「集い」の成果を期待したい。 今年(H21)7 月、三浦雄一郎氏をお招きしての講演と、指導者制度制定 70 周年記念事業を併せて開催した「集い」は、ここからスタートした。本協会の「会員相互の親睦と研究交流」の目的を達する為の活動の柱として、何回かの中止はありながらも今回の旭川大会で 22 回を数えることが出来た。柴田会長の「今後の集いの成果に期待したい」の期待に応えるべく、今後とも開催体制の強化と内容充実に努力していきたい。																				

8、活動充実、63 支部加盟

S 61,9,28 札幌クラブ	昭和 62 年度 代議員会及び支部長会議 ・一般経過報告（52 支部、4,200 名） ・各支部のスラローム大会へのトロフィの寄贈
--------------------	---

	・第2回「指導員の集い」の開催 その後、(62,1 開催)幹事会において、名称を「指導員会の集い」と改めた。
S 61,9,28	シュプール14号(復刊7号) —掲載項目前号と変わらず— —柴田会長巻頭言(要旨)— 私は、「こんな研修会があったら」と夢を追った。誰でも何処の研修会にでも参加でき、会場毎に地域の特性を活かして、SAJのテーマ以外に登山、ツアー、クロスカントリーなどにウエートを。ある会場では、将来のスキー学校のあり方について、技術の探求、指導法の探求などなど。上意下達の今の研修会のマンネリから抜け出す為の模索を始めなければならない時に来ていると思う。 現在の指導員研修会は、以前に比べ大分上意下達の色は薄められてきている。特に道連は「特色ある研修会」を標榜して、種々の改革に取り組み成果を上げてきている。20数年前に指摘した柴田先生の夢に近づいているのだろうか。
S 62,2,21 ~22 朝里川温泉	オーストリースキー技術特別研修会 ・講師 ヘルムート・アゲール 基本姿勢 山開きシュテムターン 谷開きシュテムターン 山開きパラレルターン 谷開きパラレルターン 立ち上がりパラレルターン 沈みこみパラレルターン ステップターン 制限滑降 ウェーデルン
S 62,8,23 東京	日本スキー指導員会総会 ・スポーツ指導員資格付与の問題 ・日本スキー指導員会がSAJ組織図に外郭団体として位置づけられた ・役員改選(会長以外は道指導員会関係のみ) 名誉会長 柴田 信一 顧問 栗林 薫 会 長 松浦益司郎 副会長 速水 潔 常任幹事 近藤 晃 幹 事 福地 白 飯田誠一
S 62,9,5,6 洞爺湖温泉 科学博物館	第2回全道スキー指導員会の集い(参加者100名) <6日> ・開会式 挨拶:小室副会長、柴田会長、清野室蘭地方スキー連盟会長 ・講 演 講師:志賀次郎(国際ジャーナリスト) ・演 題 「世界のスキー・日本のスキー —技法の発展とスキーヤーをめぐる環境—」 ・懇親会 洞爺湖温泉 翠明荘 <7日> ・ゴルフコンペ及び有珠山観光
S 62,9,27 北電北二条 クラブ	昭和63年度代議員会 ・一般経過報告 第2回全道スキー指導員会報告、日指報告(人事:柴田名誉会長他) ・運営方針(柴田会長) 全国的にも高い評価を受けている「シュプール」の一層の充実 仲間の親睦交流の点から「全道指導員会の集い」の推進

	内部を固めたら、次は外部へも向かう指導員会でありたい。SAJ の機構に日指は入っている。道連はもただが今後推進方を。 ・規約改正（坂井当時副会長提案） 「日本スキー指導員会」に倣って「基礎スキー」の基礎を取って「北海道スキー指導員会」と名称を変更する。 ・役員改選 名誉会長 柴田信一 会 長 栗林 薫 副 会 長 佐藤哲郎、速水 潔、小室浪一、坂井敏夫、中川伊佐美 監 査 二瓶康典、新田利雄 (後日決定) 幹 事 長 近藤 晃 副幹事長 菊池真一郎 幹 事 <table><tr><td></td><td>部 長</td><td>副 部 長</td><td>部 員</td></tr><tr><td>総 務 部</td><td>福地 白</td><td>平垣平八郎</td><td>松川 恒</td></tr><tr><td>事 業 部</td><td>中川 明</td><td>石黒 弘</td><td>田制 康</td></tr><tr><td>広 報 部</td><td>菊池真一郎</td><td>竹内 恒夫</td><td>中尾 誉</td></tr><tr><td>会 計 部</td><td>飯田 誠一</td><td>戸塚 浩司</td><td></td></tr></table> ・栗林新会長挨拶 副会長の中で長老であるからと思う。柴田前会長の意志・方針を継いで努力したい。道連加盟支部のうち 11 支部が未加盟。これを解消したい。 ・会員数（年度末）: 63 支部、4969 名		部 長	副 部 長	部 員	総 務 部	福地 白	平垣平八郎	松川 恒	事 業 部	中川 明	石黒 弘	田制 康	広 報 部	菊池真一郎	竹内 恒夫	中尾 誉	会 計 部	飯田 誠一	戸塚 浩司	
	部 長	副 部 長	部 員																		
総 務 部	福地 白	平垣平八郎	松川 恒																		
事 業 部	中川 明	石黒 弘	田制 康																		
広 報 部	菊池真一郎	竹内 恒夫	中尾 誉																		
会 計 部	飯田 誠一	戸塚 浩司																			
	昭和 54 年 10 月、再起指導員会会長に就任以来、問題を提起し、警鐘を鳴らし、組織の団結を訴えリードしてきた柴田先生が勇退した。横の繋がりを大事にしてきた柴田先生の人柄が 63 支部加盟の数字になって現われている。																				
S 62,9,27	シュプール 15 号（復刊 8 号） —掲載項目前号と変わらず— —付 録— 1、昭和 37 年までの「指導員一覧（北海道）」 副会長 佐藤 哲郎 2、「シュプール」編集内容一覧（発刊から 7 号まで） 事業部 3、「シュプール」編集内容一覧（8 号から 14 号まで） 事業部 4、「全道スキー指導員会の集い」アンケート解答用紙 佐藤副会長の「指導員一覧」は労作である。S 14,12 の「第 1 回指導者講習会（五色温泉）」から始まって、S 36,3（小樽）までの指導員合格者 315 名の名前が手書きでびっしりと書かれてある。S 18,3 最初で最後、ただ一度の樺太検定会での合格者 6 名も入っている。「柴田会長から、早急に正確なものを作成するよう要請をいただき再調査に着手したら、道連が新たに取りまとめる企画が報ぜられたので、その完了を待機していたが埒が明かず、別箇にまとめたものである。（中略）柴田先生の指導者番号は 28 号で、1～27 号は SAJ 会長や講師陣に無条件で与えられたものと思う」																				

S 63,2,21 朝里川温泉	オーストリースキー特別研修会（参加者 30 名） ・ 講 師：オーストリー国家検定教師 エルンスト・ヒンターゼアー・J r ・ 受講者報告 （旭川 畑山 豊） —実技指導のポイント（抜粋）— 主にシュテムターン、パラレルターンを中心としての指導の中で 谷スキーでしっかりエッジングを強めることにより、シュテムターンやシェーレンは容易になります。 回転の後半は次の回転の成否に係わるので、大切にする必要があります。 回転にあたっては、両脚の曲げ伸ばしをゆっくり大きく有効に利用することが大切です。ジャンプは、曲げ伸ばしを大きくしたものと考えます。
S 63,7,30 札幌フジヤ サントス ホテル	第 3 回全道スキー指導員会の集い（参加者 63 名） ・ 講演 講師：北海道大学低温科学研究所 助教授 広瀬 廉二 ・ 演題 雪氷学からみたスキーの運動（講演内容：抜粋） 「スキーとは」 地球の引力を最大限に利用する（位置エネルギー → 運動エネルギー） 摩擦が小さいことを有効に利用する（雪・氷の特異な性質） 起源は歩く道具 競技場のコンディションが、場所・日により大きく異なる （世界記録が無い、自然に非常に近い） 「雪とはどんな物質か」 雪の結晶の種々 山の雪・里の雪・スキー場の雪 雪崩は何故起こるか・どう防ぐか どうすれば速く滑れるか 広瀬先生の講演内容を読むと、スキーの原点に立ち戻られる。位置エネルギーを運動エネルギーに変えること。落下運動であること。近年、SAJ 研修会テーマの中で盛んに言われている。特色ある研修会で、自然に非常に近いスポーツであることも改めて認識させられる。

9、「国家認定スポーツ指導者資格付与」問題

S 63,9,24 ホワイトラ ンド・イン・ 札幌	平成 64 年度代議員会及び支部長会議（63 支部、5,229 名） ・ 一般経過報告 ・ 日指報告 国家認定スポーツ指導者資格付与について 「地域スポーツ指導者」「競技力向上指導者」「商業スポーツ施設 ける指導者」に。夫々「初級」「中級（準指導員）」「上級（指導員）」 SAJ としては、63 年度を目途として青木理事が文部省と折衝中 ・ 協議事項 指導員制度 50 周年記念行事 今も私の手元に、《文部大臣認定「社会体育指導者の知識・技能審査事業」 （商業施設における指導者 / 初級）『C 級教師教本』財団法人日本体育協会》 なる 1020 ページにも及ぶ赤布張りの本がある。平成 2 年 12 月の車山高原での
--	---

SAJ 中央研修会で上記の資格付与制度が実質スタートしたときのテキストで、当時冗談で、「昼寝の枕に出来る」と云っていた代物である。

平成元年 9 月発行のシュプール巻頭言で栗林薫会長が、“ 危急存亡のとき ” と題して次のように述べている。

「数年前から、マスコミを通じて＜社会体育指導者資格付与制度＞を耳にしてきた。しかし、我々五千有余名の身分上に関する極めて重大な問題であるにも拘らず、一度も我々下々の意見を訊かれた覚えは無い。(中略) 既に見切り発車してしまった折に水を差すようで『今頃なんだ』と批判されることにもなるうが敢えて若干の意見を披露したい。今年は、＜スキー指導者制度＞が創始されてから満 50 年を迎える記念すべき年に当たる。日体協に属するスポーツ諸団体で、我がスキー連盟に匹敵するほどの伝統を有するものが他にいくつあるであろうか。この伝統までも崩してのこの制度の導入は、国家統制とでもいうべきで、指導者制度の無かった団体に対しては助成の手を差し伸べることはあっても、我々スキー連盟の伝統に対しては寛大な対処の仕方があってしかるべきではないだろうか。『日指会報インストラクターNo37 掲載 準指導員検定が消えるのか？(林幹事長)』の論評の如く、こと準指導員検定のみならず指導員検定も消えるのである。まさに、我々にとっては＜危急存亡のとき＞と言わざるを得ない」

この問題は、この後しばらく議論されてきたし、今も問題をはらんでいる。

このことに関して、当時の責任者・菅秀文 SAJ 教育本部長(現日指名誉会長) は昨年「北海道スキー指導者協会の集い・2008 網走ブロック大会」の挨拶で次のように述懐している(シュプール No36)

「＜文部大臣付与スキー指導者＞を作ったのですが、それがいい加減なものでした。文部省のスポーツ課長が、日本体育協会の事務局長に天下りの為の手土産で、＜国家認定＞ではなかったのです。それを受けたのは私であり責任は私にあります。私は、＜国家認定スキー教師・国家認定スキー指導者＞としてくださいと条件をつけたのですが、結局は騙されたのです」

何をか言わんや、である。平成 2 年、＜国家検定指導員＞を夢見て受講し、必死に何十枚ものレポートを提出して取得した資格の実状が 19 年後明らかになり、何とも虚しさを感じるのは私だけだろうか。私はこの話を聞いて 3 年毎の資格継続料納入を止めた。

S 63,924

シュプール第 16 号(復刊 9 号)

—掲載内容—

- | | | | | |
|------------------------------------|-----------|------------------------------|-----|------|
| ・退任にあたって | 名誉会長 柴田信一 | 前にも記述したように、
両方とも 1 年遅れの掲載 | | |
| ・会長就任にあたって | 会 長 栗林 薫 | | | |
| ・研究 | 4 本 | ・ Q&A | 1 本 | |
| ・特別寄稿 | 4 本 | ・紹介 | 4 本 | |
| ・支部たより | 5 本 | ・事務局より | ・随想 | 11 本 |
| ・付録(シュプール掲載内容 NO . 1 ~ NO . 1 5) | | | | |

この号の最大の特徴は、A5 版から B5 版と紙面を大きくし、縦 2 段の現在

	の様式になったことである（表紙緑色は変わらず）。 研究として、坂井和夫現副会長が「定時制高校でのスキー選手養成」―特色ある学校づくりに倶知安高校定時制の試み―を載せている。 先日、同校で学び、後に全日本の滑降を制したこともある小倉進君に話を聞く機会あった。「日中、練習がビッシリで夜の勉強は眠かった。先生方は温かかった。励まされた。辛かったが楽しかった」と語ってくれた。 平沢文雄先生に「新しいターン技術への模索」を特別寄稿して頂いています。あとがきに「玉稿を掲載し、紙面に一層の彩りを添えさせていただきました」とあるように、大変貴重な原稿の掲載でした。 平沢先生には、“農耕民族と狩猟民族の脚の違い”“伸脚時の脚の内転”などのスキー理論をお聞きする機会があり、また、前述の車山高原での＜指導者資格付与講習会＞で、先生と机を並べさせて勉強させていただいて、そのスキーに対する情熱、スキー理論の豊かさには感服させられました。
平成元年 7月15日 小樽自然の村 「おこばち山荘」	スキー指導員制度 50 周年記念「第 4 回北海道スキー指導員の集い」開催 ・表彰：柴田信一名誉会長に表彰状、S31,1 までの資格取得者に感謝状 ・座談会：「これからの指導員と指導員会 ―いま指導員に問われること―」 出席者：柴田名誉会長、栗林会長、佐藤・坂井・小室副会長、受賞者の先達、菊池広報部長（司会） ・記念講演「第 1 回指導員講習会の前後（要旨）」柴田 信一 名誉会長 高橋次郎先生が「（S13 年 12 月、全日本が全国 60 箇所で開催）教えることマチマチ、教える形・スタイルは別々。これじゃ SAJ の講習会としては困る。（S14 年）12 月に新しい指導者をつくるから、柴田、お前手伝ってくれ」と言われた。」「私は当時、テンポシュブングの言葉が入った時代に、かなり高い姿勢で天狗山の壁を大体 3 ターンぐらいのロングターンで下りた。ただ、直滑降より曲げ方の方が難しい。そういう風にやっていたら高橋先生が『サンアントンのベンノー・リビッカのそっくりだ。誰から習ったんだ？』『いや、私一人で考えて、写真なんか見てやっているんです』と答えた」
	柴田先生は、「天狗山で直滑降を午前中 10 本とか、アルペン競技を楽しんでいた」ので、最初は指導者講習会を手伝うのはいやだったようです。「アルペンスキーから基礎スキーに移るのは断腸の思いだった」と話しています。その柴田先生がその高い技術性を持って、戦後、日本の指導者の中心になっていくのです。 （次回に続きます）

< 参考資料 >

- ・ 北海道スキー指導者協会機関誌 シュプール第 8 号～第 18 号
- ・ 日本スキー教程副読本「カービングスキーのスキー指導」（1997,12,15 発行）
- ・ 文部大臣認定「社会体育指導者の知識・技能審査事業」（商業施設における指導者 / 初級）『C 級教師教本』財団法人 日本体育協会（H2,10,1 発行）
- ・ 栗林薫編著「北海道一般スキー八十年の歩み」（H3, 8, 1 発行）
- ・ 柴田信一先生遺稿集（H8,1,15 発行）